

Collection Exhibition

The Age of Light and Shadow
Art of the 1920s and 1930s

春の所蔵作品展

本館一階（縮景園）1920年代後半～1930年代前半



光と影の時代 1920 - 30年代の美術

2018(平成30)年 4月18日(水) → 7月1日(日)

2階展示室

開館時間: 9:00 - 17:00

※金曜日は20:00まで開館、入場は閉館の30分前まで

休館日: 月曜日

※特別展会期中・祝日・振替休日を除く

※5月28日は、展示替のため所蔵作品展は閉室

入館料: 一般 510(410)円、大学生 310(250)円、
高校生以下無料

縮景園との共通券: 一般 610円、大学生350円

※()内は20名以上の団体



- JR広島駅より約1km
- 広島城より約400m
- 市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白鳥線で「縮景園前」下車20m
- ひろしまめいぐる〜ぶ(市内循環バス、JR広島駅新幹線口のりば発着)「県立美術館前」下車(白鳥線沿い)

press release

【概要】

広島県立美術館 春の所蔵作品展

光と影の時代 — 1920～30年代の美術

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、今年2018年、開館50周年の節目を迎えることができました。

開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてきました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本及びアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

今年度の所蔵作品展は、コレクションの魅力を様々な角度からご紹介します。今回は「光と影の時代—1920～30年代の美術」のテーマのもと、当館コレクションを時代で輪切りにすることで、ふたつの大戦を含んだ時代の美術を感じていただけます。また、特別展に関連した「パリジェンヌ展へのオマージュ」もお楽しみください。

来館するごとに新しい美の魅力を発見していただける展示をめざし、今後も努力を重ねていくことで、美術館を支えてくださる皆さま方への感謝の気持ちを表してまいります。今年度、4期の所蔵作品展にご期待いただきたく思います。

【内容】

光と影の時代 — 1920～30年代の美術 西洋美術

この展示室では、西洋における両大戦間期の美術動向をご紹介します。

第一次世界大戦後の欧米諸国には、新たな世界の建設をめざす前向きな機運がありました。これに呼応するのが、産業社会の価値観にふさわしい芸術を模索する動きです。ロシア構成主義のエル・リシツキー《プロウン》や、バウハウスの版画集には、キュビズムから幾何学的な造形表現を受け継ぎ、建築などデザインの分野と美術を結びつける試みの一端がみとれます。

一方で、大戦を経た人々の心に社会への不信が影をおとしていたのも事実です。ドイツのジョージ・グロスやアメリカのベン・シャーンは、格差や不正といった矛盾を鋭く描き出し告発しました。

さらに人間の理性を否定し、通念にとらわれない真の思考の働きを表現する動きが生まれます。国境を越えて広がった、ダダイスムからシュルレアリスムへと続く流れは、同時代を代表する運動といえるでしょう。ここではドイツのマックス・エルンストラが用いた前衛的な技法をご紹介します。

揺れ動く時代状況に、芸術家たちはどう向き合ったのか。その多様な試みを、17名の作家による当館所蔵の優品を通してご覧ください。



ライオネル・ファイニンガー《海辺の夕暮》1927年 油彩・画布

press release

光と影の時代 — 1920～30年代の美術 日本洋画

二つの世界大戦に挟まれた1920～30年代は、第一次世界大戦後の活況などを背景に日本人画家のヨーロッパ留学が増えるとともに、雑誌等のメディアも発達し、西洋の先進的な美術思潮がほぼ時を同じくして日本に紹介されるようになった時代です。洋画家たちは、新しい表現様式に学ぶ一方、単なる模倣ではない、日本人ならではの絵画表現を模索しつつ、個性的で創意に満ちた清新な作品を生み出していったといつてよいでしょう。

この展示室では、1920～30年代の作品を中心に、終戦を迎えるまでの四半世紀の間に生み出された油彩画31点をご紹介します。ヨーロッパに学んだ成果を伝える、黒田重太郎や児島善三郎、田中万吉らの滞欧作。永田一脩や山路商、鬩光や今西中通らは日本で制作を行いつつも、西洋の先進的な絵画手法を取り入れながら独自の表現を模索しました。

多種多様な美術情報が、視野を広げる“光”として射し込むと同時に、恐慌や戦争といった“影”も深まったこの時代に生きた画家たちの作品からは、独自の絵画をめざす絶え間ない探求と、日本洋画の成熟を感じていただけることと思います。



永田一脩《静物》1925年 油彩・画布・コラージュ

光と影の時代

— 1920～30年代の美術 日本画

社会が激動した「光と影の時代」—しかし、日本画の場合、一見すると「影」の部分が見えにくいように思われます。そこに日本画というものの特性、社会的立ち位置が表れています。

1920年代は、例えば児玉希望《飛泉淙々》のように洋画と拮抗しうるような細密描写による写実表現が多く見られました。また、渡欧する日本画家の増加により、かえって日本の伝統への関心が高まった時代でした。

都市と農村、貧富の格差など「光と影」が激しく対立した1930年代には、小林古徑や福田平八郎らによる、端正で洗練された「新古典主義」様式が流行しました。他方で、シュルレアリスムや抽象絵画を吸収した新たな日本画表現も試みられるなど、多様で豊かな時代を迎えます。

しかし、戦時になると状況が変わります。目に見えて暗い絵が多く描かれたわけではありません。むしろ、華やかな歴史画や仏画、富士や桜を描いた作品が、国民のナショナリズムを刺激し、精神に働きかける役割を担いました。時代の激動を、画家たちの生きた痕跡そのものである作品から追体験してみたいかがでしょうか。

press release

パリジェンヌ展へのオマージュ

この展示室では、特別展「ボストン美術館 パリジェンヌ展 時代を映す女性たち」の開催を記念して、所蔵作品によるパリジェンヌ展関連展示をご覧ください。

江戸時代、17世紀後半に佐賀県有田で作られた《伊万里柿右衛門様式色絵馬》は、海を越えてヨーロッパに渡り、3世紀を超える年月をフランスで過ごしてきた歴史の証人です。小林千古は明治時代、19世紀末、アメリカやフランスで学んだ伝統的な絵画を日本へ伝えた作家のひとり。菅井汲は戦後、フランスに渡り、国際的に活躍した日本人作家のさきがけとなりました。森口邦彦はパリ国立高等装飾美術学校でグラフィック・デザインを学び、伝統的な友禅染めに幾何学的要素を斬新に取り込んだ作品を制作しています。

また、スペインのジュリオ・ゴンザレスは、鉄彫刻の父と称され、溶接による鉄彫刻は現代彫刻に大きな影響を与えた彫刻家。一家でフランス、パリに移住したゴンザレスにとって、《鏡の前の女》はパリジェンヌの肖像なのかもしれません。

フランス、あるいはパリジェンヌにつながる作品群を通じて、パリジェンヌ展の余韻をお楽しみいただければ幸いです。



森口邦彦《Etude sur le vert 12》1984年 紙・友禅技法

光と影の時代—1920～30年代の美術 工芸

今期の特集「光と影の時代—1920～30年代の美術」から、この展示室では工芸の2つのテーマにフォーカスします。民芸、美術としての新しい工芸をご覧ください。

1925(大正15)年、柳宗悦らによって民衆的工芸を示す言葉として造られた民芸。手仕事によって生まれ、暮らしの中で使われてきた日用品に美を見出しました。河井寛次郎、浜田庄司、バーナード・リーチらは民芸運動を牽引する役割を果たしました。

一方、フランスのサロンに倣って、1907(明治40)年、官展である文部省美術展覧会(文展)が始まり、1919(大正8)年からは帝国美術院展覧会(帝展)となりました。日本画、西洋画、彫刻の3部門のみで構成されていたことに対する、工芸部設置運動がかない1927(昭和2)年に第4部として工芸部が成立します。純粋な美術としての工芸への志向は、陶磁器や金工、漆工など広がりを見せ加藤土師萌、赤塚自得、吉田源十郎らに加えて、広島県出身者の清水南山や六角紫水も美術としての工芸を追求しました。

近代の工芸家たちによる両大戦間の時代の空気を感じてください。



河井寛次郎《青瓷桃子餅》1923年 青磁

press release

学芸員によるギャラリーリレートーク

「光と影の時代—1920～30年代の美術」をテーマに当館学芸員が各室の見どころをリレー形式でご紹介する豪華なトークイベントです。

日時:2018年5月25日(金) 11:00～(60分程度)

場所:2階 展示室

講師:角田 新、福田 浩子、森 万由子、藤崎 綾、神内 有理 (当館学芸員)

※ 申込不要、要入館券。会場入り口でお待ちください。

※ 高校生以下、65 歳以上の方は無料です。学生証および年齢のわかる証明書をご提示ください。

友の会ボランティアガイド

当館友の会ボランティアガイドが所蔵作品展についてわかりやすく解説します。

日時:平日14:00~/土日祝11:00～、14:00～(1時間程度)

場所:2階 展示室

参加料:無料

※要入館券(高校生以下無料)、申込不要

※12/26～1/4は休み。

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も**本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。**

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、
当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館まで
ご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail m-kaminishis4677@pref.hiroshima.lg (上西宛)または、
iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 藤崎 綾

総務課 広報担当 上西 真由美 一色 直香